

巻頭言

研究のためのコミュニティ

コミュニティ福祉学研究科委員長 三本松 政之

こんにち学問分野の専門分化が進む一方で、私たちが研究をするにあたって共同は、欠くことのできないものになってきています。研究の問題意識や関心は研究者個人によって相違しますが、それらの問題認識を共有することによって共同研究が行われます。

専門分化が進めば進むほど、その課題に精通している者でないと、誤りが見過ごされたりする可能性は高まります。そのため学術誌への投稿や助成研究の審査では、雑誌の編者や助成機関は申請内容を審査するに相応しい研究者に原稿や申請書の審査を依頼し、それらの研究や助成の申請内容が採用するに値するか否かについての判断を委ねるというピアレビューの形をとることが多くみられます。

ピアレビューは論文や助成審査にあたってその分野に精通した者による審査のことですが、ピアレビューでは研究者コミュニティ自らが選ぶ研究者により審査されます。投稿者や申請者には審査者が誰であるかは知らされません。審査にあたっては1つの論文や申請書に対して、1名だけでは意見に偏りが出る場合があるために複数名の審査者が指名されます。審査者の意見が大きく異なる場合には第3番目の審査者を依頼することもあります。

研究費の代表的な助成制度である科学研究費助成事業（科研費）は、競争的研究資金であり、「ピアレビュー（同業者（peer）が審査すること（review）で、科研費においては、学術研究の場で切磋琢磨し『知の創造』の最前線を知る研究者が審査、評価するシステム）による審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うもの」（日本学術振興会ホームページ）です。

『科学研究費助成事業（科研費）審査システム改革2018について』（日本学術振興会、以下「改革2018」）では、科研費は「研究者が建設的相互批判の精神に則って相互に審査しあうピアレビューを基本としており、研究者の不断努力によって支えられている」としています。

科研費については「研究者コミュニティから最も評価されている制度といっても過言ではなく、その信頼性を支える重要な要素は、昭和43年度に基本的な構造が形作られ、半世紀にわたって不断の改善が図られてきたピアレビューの審査システムである」とされます。そして、科研費の審査は「学術コミュニティの協力なくしては成り立たない」とし、「審査委員は、専門分野の代表ではなく、担当する審査区分全体の応募の中から研究計画調書に基づいて、優れた研究課題を選定する責務があり、審査は学術コミュニティが育んでいくものである」（「科学研究費助成事業の審査システム改革について」平成29年1月17日、科学技術・学術審議会 学術分科会）としています。さらに「研究活動における不正行為への対応は、研究者自らの規律や研究機関、科学コミュニティの自律に基づく自浄作用によるべきものである」ともされます（「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」（平成26年8月26日、文部科学大臣決定））。

研究者のコミュニティによる自律的な協働としての論文や研究助成のピアレビューにおける審査に関わる審査者の作業時間といった目に見えないコストはかなり大きく、研究者の負担となるものです。これらの作業は、無償で行われる場合が少なくなく、また審査者は審査のため

に自身の研究のための時間を割く必要があります。それでもこのような営みが、多様な「知」の創造を目指し、「知」の限界に挑む学術研究にとって、「何ものにも束縛されない発想の自由」(「改革2018」)を担保するものとなっているといえます。本誌では査読制度は採用されていませんが、編集は院生により自主的な共同によっ

て行われており、原稿の募集、印刷所との折衝、校正の進行管理など多くの仕事が担われています。研究は自らの研鑽とともにコミュニティの無償の活動によって支えられていることを自覚して、コミュニティへの主体的な参与を期待します。